

います。

平成十二年の喜寿を期に、子供達は異種の職業のため、測量業の跡継ぎが出来ず、四代続いた測量業も同業社や周囲の方々から惜しまれましたが廃業することにしました。

妻も社員でしたので、現在、二人の厚生年金で細々と生活しながら、健康のため林業のボランティア活動をしております。

早稲田大学学長の大隈重信翁の百二十五歳まで健康で生きる、何でもできる精神を持って、これに応えるため努力出来たのは前にも申し述べましたが、軍隊生活中に先輩並びに中国人を含め周囲の方々から受けた教訓によるもので感謝しお礼申し上げます。

一昼夜・麦畑に伏せ

神奈川県 荻窪 藤 作

私は、黒潮や親潮の荒れる太平洋も、房総の浜、近くは三浦半島に守られ、穏やかな東京湾に面した港町横浜に隣接した町「大和」に生まれ、幼児の頃から近隣の古老の語り部の話を聞いて成人しました。「日本国は相模の大和がはじまりだ」、奈良地方も「大和」だが俺達の「大和」が本家本元、日本発祥の地だと自己主張の強い古者がいました。私もその薫陶を受けました。西を望めば日本一の富士の山があり、地元には流れ清き相模川、境川など格好の水遊びや水練の場がありました。至極風光明媚な地方でした。もちろん人心も豊かでしたが、昔の関東武者的要素も多分に内臓していました。近隣の童でも、自家の倅も同一で、不正は叱責し、鞭打ち、正しいものには満腔の思いで賞したものでした。

我が家は、両親の元に男児六人、女子二人の八人兄弟（十人家族）で私は三男でした。家は農業で生計を立てていました。田地五反歩は小作農、畑地は広く一町歩は自作農でした。田地は米と麦の二毛作でした。畑は年中それぞれ季節に適応した作物を生産していましたが、一年中が農繁期のごとくでした。このため子供たちは餓鬼大将で遊ぶという機会も必然的に少なくなりました。反面家庭内は円満そのもので、絶えず笑い声や子供の歌声が充ちていました。学校は理解ある両親のお陰で、高等小学校まで八年通学し卒業しました。

あの頃は、大正から昭和初期にかけての経済恐慌という不況の時代でした。

地方によっては生活のために「人身売買」があったそうです。また昭和七（一九三二）年五月十五日の五・一五事件における海軍青年将校と、昭和十一年二月二十六日の二・二六事件における陸軍青年将校等によるクーデターがありました。両者共に国家・国民・貧民を憂いての事件でした、

と聞いております。私は家業を手伝いながら弟妹の面倒を見ていました。

当時は青年学校で訓練・教育を受けることが義務づけられていました。週間六時限度でした。ここでは心身共に鍛錬され、人生勉強にも大いに役立ちました。昭和十三年四月一日、国家総動員法が公布され、翌年には、大学・高等専門学校にも軍事教練が義務化されました。昭和十六年、東条陸軍大臣が「戦陣訓」を発表されました。「我れ戦陣は、皇軍の神髄を發揮し、攻むれば必ず取り、戦えば必ず勝ち」と大変厳しい教えでした。

昭和十八年六月頃でした。自分にも徴兵検査の時が来ました。そして役所の兵事係から呼び出しがあり、事前の注意事項が示されました。当日会場は顔見知りの友達や同級生ばかりでした。会場は一種特別な空気がみなぎっていました。「日本男子の義務を実施するのだ」ということでしょう。自分は「甲種合格」と宜せられ、係官に復唱して無事に終了しました。

翌日、兵事係から「入隊に備えて」の話がありました。「特に身辺の清潔及び整理して置くこと」が主でした。当日既に外地出陣部隊の玉砕とか悲惨なる戦場の話を耳にしていました。若き日の思い出にと「悪所遊び」に走り、不衛生な病氣（花柳病）に患って、軍隊へ入隊して「即日帰郷」といつて入隊出来ず、「不適格」との烙印を押されるようなことがあったら大変でした。盛大なお見送りで「祝入営」が一瞬にして悪夢と化すからです。本人のみならず親族一門はじめ、町役場まで最大の不名誉です。それをおそれて「老婆心ながら」と特に注意されました。

昭和十九年二月に大阪城の隣の大坂歩兵第八連隊へ集合しました。一週間ほどここに起居しました。軍服上衣下衣、襦袢（シャツ）、股下（パツチ）など全部新品でした。それに冬用と夏用と二種類を受け取りました。古年次兵が大きな声で「全員、気を付け」と号令を掛けて「ただいま、支給せし軍服は天皇陛下からの与り品である。大切に取

扱うことだ」でした。自分の物品には全部自分の氏と名の頭文字を記入しました。自分の場合は「萩・藤」と云う様に書き入れたり、記入した片布を縫い付けたり大変でした。

また兵器も三八式騎兵銃をはじめ帯剣から防毒面等々、完全軍装品が支給されました。銃と帯剣は一連式番号が刻印してあって、それぞれの履歴は全部統括してあるのです。自他の見分けは刻印だけです。そのためには自分用の氏名入り片布を付けていました。

現地部隊より「初年兵受領」と云って軍曹が迎えに来られ、総員二百四十人を第一、第二と二個小隊に分別された。一個小隊百二十人、それをさらに第一、第二、第三と十個分隊に分け同時に分隊長、小隊長と同期生に選出させました。要は連絡係で「取りまとめ役」です。これで編成が完了しました。

身体は冬服着用ですが、背のうには夏衣服を入れました。行く先は「ハテナ？ 北か南か」の思

いでした。列車は大阪駅の貨物ホームから出発し下関へ向い、車窓はよろい戸を降ろして閉鎖し、ガタンゴトンという音のみで外の景観は一切見られません。停車して「下車」の号令でホームに出て、始めて下関埠頭と知ったのです。水筒にお茶を入れて頂き「このお茶が日本最後の茶だぞ」と語り合いました。

御用船にて釜山へ渡ります。波は静かで「船酔い者出ず」小休止の後、列車に乗り朝鮮半島を一路北上しました。京城（ソウル）を通過して平壤から鴨緑江を渡り新義州（満州国入り）錦州から山海関にて満支国境を通過、いよいよ広大な支那大陸です。自然に自分まで大きくなったような気分でした。

天津・北京・張家口・大同・平地泉を幾度となく停車と発進を繰り返しながら、目的地の「包頭駅」に到着しました。日時を忘れるほどの列車の長い旅でした。

ここ包頭は北支那大陸の中央部付近で、北方に

内蒙古が隣接し、南にはるかなる大黄河がとうとうと流れている。駅頭に整列して、古年次兵の迎えを受け、指示に従って兵営まで行進しました。三月の末頃ですが、寒さ厳しく、内地からの冬衣服では寒さのために行動に難渋しました。任地の部隊名称は北支派遣軍「滝」第五三四二部隊です。なお部隊は搜索連隊でした。当初より自分は歩兵と思っていたので銃が三八式騎兵銃を支給され、これまで不思議だと思っていたのです。

昭和十五年までは騎兵連隊でしたが、軍事行動では騎馬は機動自動車に変わっており、迅速・機敏を旨とし軽戦車を装備した連隊となっていました。各称も騎兵連隊は搜索連隊と改称していました。

なお大阪出發当時の二百四十人は各兵科に分散しました。自分達は二個分隊二十六人が搜索部隊でした。

初年兵教育は集合教育で、係将校の下に下士官一人、同助手として二年兵の優秀者が一人でした。教育係教官から「諸君の教育は、本日本ただいま

ら即戦態勢にて行う。戦地である事を瞬時でも忘れることなく、先輩の指示指導によって確実迅速に成果を發揮されたし。自分は青年学校の教育訓練が大いに役立って楽々と指導を受け入れました。内容は第一番が明治天皇陛下より下された「陸海軍人に賜りたる勅諭」です。次に「戦陣訓」、その他「典範令」全巻並に日常駐屯地等の守備守則等々一切を全部丸暗記しました。もちろんすべてが実施、実行でした。

第一期検閲も満足に行われず、各中隊に配属されました。自分は鈴木中隊・佐藤少尉の第一小隊の第一分隊でした。配属即出動となりました。当時は蒋介石の国民政府正規軍（国府軍）と毛沢東の中国共産党軍（八路軍）が共に強力なる人海戦術で、撃たれても撃たれても直進して来ました。討伐とか一斉掃討作戦と銘打って出動しました。わずかに二、三日の時もあり、また一週間から十日間位いの長期の時もありました。とくに印象に残っているのは夜間の歩哨勤務でした。夜間は零下

生命懸けの第一線ですが、寒気が身体に加わりますと、自然に睡魔が襲ってきます。立哨中でいかに緊張していても、瞬間的に居眠りするところがありました。生命は自分一人に非ず、分隊、小隊、中隊と全軍の戦力に繋がるために心に強く戒めました。

昭和十九年八月、河南作戦（黄河の南方面）洛陽の攻撃の時でした。鈴木中隊長を先頭に佐藤小隊第一分隊は洛陽に向かって「一直線に進軍し敵を殲滅せよ」との命令でした。一面の麦畑が続き軍歌の「麦と兵隊」を思い出します。はるか遠くにクリークがあり、その前面に敵陣が長く広く塹壕を掘って対峙していました。

にわかには砲声が上がりに、途端に敵陣地から機関銃（マンドリンと呼ぶチェコ銃）や小銃弾が雨霰のごとく飛来してきます。遮蔽物の一物もなしです。鉄帽の顎紐を力一杯締めつけて、麦畑の畝と畝の間の少し凹んだ所に顔面を突っ込んで、息を殺して命令を待ちます。銃声が一時止まりました。

二五度位まで気温が低下します。三寒四温といい三日単位で寒波が来ました。その時は防寒帽子の顔近くは吐く呼吸気で氷が毛皮に付着し、鼻の指が凍傷になった戦友もいました。手の指や足の指も凍傷に注意して、夜間勤務の時は、軍靴の中で足の指先をたえず動かしていました。空気が乾燥しているので気管支を痛めぬようにも注意しました。

また前線での分哨勤務で歩哨に立った時は大変でした。絶えず四囲警戒するのです。荒野に一人「ポツン」と立ちん棒では、遠隔地点からでも発見されます。地形、地物を最大に利用し、かつ擬装網で草木を着けて体形を敵に察知されぬように務めたことなどでした。

夜間北の空に北斗七星が見事にきらめきました。日本では見る事の無い美しさでした。明け方近く上弦の月が西空に研いだ鎌のごとく浮かんでいるのを見ますと、戦場に立っていることを一瞬忘れさせてくれました。

少し顔を揚げて見た小隊長や分隊長以下全員が、大地に倒れた風倒木のごとく微動だにせず、「今は辛抱する時だ」と唸り声の命令でした。そして「日没まで待て。砲兵隊の援護射撃の直後に突撃だ」でした。生理現象の小便は寝たまま、少し身体をねじってその場でします。

赤く大きな夕日が荒野のかなたへ静かに沈みます。この夕闇の中で行動可能と思いましたが、少し途絶えていた敵陣から、また一斉射撃が始まり、間断なき弾雨のため移動不可の状態でした。地上五十〜百センチ位に敵弾がシューシューと走ります。敵は目標照準を定めて銃座を固定しているのでしょうか。地上五十〜百センチのところには弾道がありました。麦畑の穂が地上五十センチ位のところから、まるで鎌で刈り取ったごとく、全部きれいに無くなっています。

我が中隊は一步の後退もできず、ただ砲兵部隊の援護射撃を待って敵の攪乱したその瞬間に突撃できた。敵陣前での移動は、第四匍匐です。両肘

と両膝で行動し、背と尻を少しでも低くして行動することです。自分が戦友の方へ少し移動すべく身体を起した時に、焼火箸が肩に突き当たった感じがしました。熱く、痛い。「やられた」と叫ぶ。

戦友が「分隊長殿、荻窪がやられました」と呼ぶ。少し後に衛生兵が来てくれ後方へ下がりました。

幸運にも敵弾は左肩貫通銃創ですが肩胛骨・鎖骨・肩関節などの骨格には一切損傷無く、ただ肩の皮膚と肉のみの貫通でした。なお同時に左腰に迫撃砲弾の破片が入りました。しかし腰骨に食い込んだ傷口があるだけで下肢全般には痛みも自由もなく行動出来ました。

前線の野戦病院にて応急手当を施され、その後北京の陸軍病院へ後送され、治療に専念しました。自分は三月から八月とわずか五カ月余りの兵隊勤務で倒れて、病院生活とは非常に情けなく思いました。病院でマラリアに罹病しました。病院では個室部屋でした。持続性熱発病・デング熱か特殊な伝染病なのか、毎日四〇度近い高熱で食欲無く、

と聞こえるだけでした。

二日ほどした時に蒋介石の国民政府軍が来て、武装解除となり全部の兵器を一カ所に集めて引き渡しました。一週間程度の後に列車にて南進し、漢口へ集結させられ、十一月の末頃までここにおりました。

蒋介石総統の取り計らいで在留邦人と軍人の病弱者から順次復員させよとのことでした。私は三番目の引揚船で揚子江を下り、上海から米軍のLSTに乗船して九州佐世保へ上陸しました。

十二月七日佐世保にて復員手続き完了でした。山陽道から東海道へと列車は進行了ましたが、いづこも目に飛び込んで来る景色は焼野原と瓦礫の散乱した街の残骸の山でした。行き交う人達の顔には笑顔は無く、眼光のみ鋭く光っていました。昔は貧しくとも、優しい顔、柔和な顔、そして誰にも笑顔で接したものです。敗戦は心まで悲惨な状態にするのだ、と私は富士山を仰ぎ見て思いました。

身体は自然に痩せ衰えて、骨と皮になりました。死亡の日も間近いと覚悟していました。軍医さんから「郊外の温泉治療所へ行くか」と云われて転院しました。

肩の負傷は完全治癒しましたが、腰の盲管銃創と発熱治療のための温泉行でした。腰骨の破片は高度の設備を必要とするため内地の陸軍病院でなくては処置不能とのことでした。ただし現在の生活活動には一切不自由ないとのことでした。病院生活も半年余りで原隊復帰命令が出て、河南戦線へ帰り「いざ戦わん」と心も燃え、中隊長に申告、小隊長、分隊長、戦友たちに迎えられました。当分病院下番だと分隊長も戦友も労わってくれ、すべて気楽にやっていました。

昭和二十年八月十六日、全員集合整列の号令に「なにごとだ」と思いました。鈴木中隊長が「全員よく聞け、昨日正午天皇陛下が、戦争は終わった、武器を納めよと、終戦の宣言をなされた」全員、寂として声なく、心臓の鼓動がごくごく

ふるさとの山は懐かしい。少しも変化なく私を迎えてくれました。横須賀の陸軍病院で左腰に食い込んだ迫撃弾の破片を除去して頂きました。敗戦協定にて神奈川県は米国の陸海軍が現在も駐留しています。自分の力で防衛出来得る国にいつなるのかなと思います。されど戦争は二度としては駄目です。

我が家も長兄が海軍陸戦隊で海南島にて戦死しました。次兄は陸軍野戦重砲連隊で活躍し南方戦線から「PW」後、昭和二十三年に帰りました。